



Title	日本語・ベトナム語における「無」ではじまる語の意味についての研究—語構成要素としての「無-」の諸相—
Author(s)	Tran, Quoc Hiep
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (TRAN QUOC HIEP)	
論文題名	日本語・ベトナム語における「無」ではじまる語の意味についての研究 —語構成要素としての「無-」の諸相—
論文内容の要旨	
<p>本論文は、日本語とベトナム語における「無」ではじまる語、特に二字漢語を対象として、その語義を分析することにより、語構成要素としての「無-」が語義の形成において果たす役割と、その意味・機能の実態を日越両言語で対照的に明らかにすることを目的とする。この対照分析は、漢字文化圏全体の枠組みに照らして行い、まず「無」ではじまる語や「無-」に共通する特徴を明らかにする。次に、各言語に固有の特徴や独自の発展を解明することを目指す。さらに、英語の否定接頭辞との比較や、否定に関する言語学的理論を参照しながら、「無-」の意味的・機能的な発展過程の特性を明らかにする。</p>	
<p>本論文は全7章で構成される。</p> <p>【第1章】は、序論として先行研究の検討と本論文の研究概要を提示した。従来の日本語・ベトナム語研究においては、(1)で示される「無」ではじまる語について、「～がない」「～が存在しない」といった言い換えが可能であることから、「存在性の否定」が「無-」の典型的な意味とされてきた(野村 1973、相原 1980、久保 2017; Phan Ngọc 2000, Đỗ Phương Lâm 2003, Cao Xuân Hạo 2017など)。否定接頭辞としての「無-」は、語基との組み合わせによって意味が構成される「合成性の原理 (Principle of compositionality)」に基づく分析が主流である。</p>	
<p>(1) a. 無罪 : 罪がない <i>vô tội</i> [無罪] : <i>không có tội</i> (罪がない) b. 無学 : 学識がない <i>vô học</i> [無學] : <i>không có học thức</i> (教養がない) c. 無形 : 形がない <i>vô hình</i> [無形] : <i>không có hình dáng cụ thể</i> (具体的な形がない)</p> <p>(2) a. 無数 - <i>vô số</i> [無數] : *数がない → 数え切れないほどの多さ、または非常に<u>多い</u>こと。 b. 無価 - <i>vô giá</i> [無價] : *価格/価値がない → 値のつけられないほどの高い価値がある、<u>貴重</u>なこと。</p>	
<p>しかし、(2)で示される「無数」や「無価」といった語に見られるように、この合成性の原理では十分に説明しきれない語義の特殊化が確認されている。本論文では、このような語の意味を「特殊な意味 (Special meanings)」と定義する。すなわち、「特殊な意味」とは、「無-」と語基の意味の単純な総和にとどまらず、意味が融合することで新たに生じる語義を指す。例えば、「無数」の意味である「非常に多い」や、「無価」の「非常に貴重な」といった語義は、「無-」が否定的形態素であるにもかかわらず、語全体としては肯定的・評価的意味を帯びる例である。王 (2006) や Nguyễn Đình Hòa (1997) は、それぞれ日本語における「無」ではじまる語の特殊な意味や、ベトナム語における「無-」の特異な用法について一定の考察を行っているが、漢字文化圏全体における「無-」、さらには世界諸言語における同様の語構成要素との対照研究には、なお探究の余地がある。これらの現象を理論的かつ実証的に解明するため、本論文は次の3つの主要課題を設定した。</p>	
<p>課題I. 「無」ではじまる語のうち、「無数」や「無価」など、否定接頭辞「無-」が、なぜ肯定的・強調的な意味を持つようになるのかを語構成要素と意味形成の関係から明らかにすること。</p> <p>課題II. 「無価」と「無価値」という形態的に類似した語において、前者が肯定的評価を示すのに対し、後者が否定的評価を示す理由を、合成性の原理および意味特殊化の観点から再検討すること。</p>	

課題III. 日越両言語における「無-」の意味的運用の違い、とりわけ「無価」が日本語において肯定的な意味を弱めている現象を考察し、その背景を言語学的に解明すること。

これらの課題を解決するために、本論文では次の4つの手法を採用した。 (i) 辞書記述および大規模コーパスを用いた実証的分析、 (ii) パラフレーズによる語義の再構成、 (iii) 日本語とベトナム語の対照分析に加え、中国語・韓国語・英語など他言語との比較、 (iv) 否定理論の導入とその説明。これらの手法は、「無-」の意味と機能の普遍性および個別性を検討するため、また、「無-」の否定的意味が使用環境や語彙の構造に応じて比喩的・強調的意味へと変容する過程を体系的に整理するために用いた。

【第2章】では、ベトナム語における *vô* [無] ではじまる語、特に二音節漢越語の意味と特徴を再検討し、*vô* [無] が古典中国語に由来する多くの語に含まれ、現代ベトナム語においても重要な役割を果たしていることを確認した。*vô* [無] ではじまる語の意味は、*vô* [無] の「không có (~がない)」というパラフレーズと、それに続く語基の意味が結びつくことで、多種多様に解釈される。本論文では、このような *vô* [無] ではじまる語を、語構成と意味解釈の関係に基づいて4つのケースに分類した。ケース①は語義が *vô* [無] と結合要素の字義通りの意味から直接的に理解される場合で、*vô hình* [無形] は「không có hình (形がない)」を意味する。ケース②は語義が *vô* [無] と語基の比喩的意味によって理解される場合で、*vô học* [無學] は直訳では「không học (学ばない)」だが、実際には「không có học thực (教養がない)」という意味になる。ケース③は *vô* [無] と語基の全体的な意味が比喩的に理解される場合で、*vô hồn* [無魂] は「魂がないように～」という意味から、「魂が抜けた、考える力を失った」様子を表す。*vô địch* [無敵] は「相手がない」から「絶対的」あるいは「優勝する」という意味に、*vô tận* [無盡] は「尽きない」ことから「とても多い」という意味に解釈される。そして、ケース④は、*vô số* [無數] の「多い、非常に多い」や *vô giá* [無價] の「貴重な、良い」といった特殊な意味が現れる場合で、語義が高度に特殊化した結果であると結論づけた。このように、ケース①からケース④にかけて、ベトナム語における *vô* [無] ではじまる語は、語義が構成要素の単なる総和に基づくものではなく、合成性の原理を満たさなくなっている語が現れていることを示しており、これが *vô* [無] の意味・機能に影響を与えていたことが明らかとなった。具体的に、現代ベトナム語における *vô* [無] は「存在性の否定」だけでなく「価値性の否定」も表すようになり、特に混種語（代表例として *vô khói* [無・多い] = 非常に多い）においては強調的な接頭辞として機能し、ベトナム語の使用習慣に基づいた独特な発展を遂げていることが示された。これにより、ベトナム語における *vô* [無] は独自に意味・機能を発展させた語構成要素であると指摘した。

【第3章】では、日本語における「無」ではじまる語の意味解釈に焦点を当て、ベトナム語において確認された意味の解釈を参照することで、日本語の「無」ではじまる語の意味も、特殊化の度合いによって異なる解釈がなされる可能性があることを考察した。例えば、「無害」「無罪」「無痛」「無職」などの語は、「害がない」「罪がない」「痛みがない」「職業がない」といったパラフレーズで言い換えられるように、「無-」と語基の字義に基づいて、その語の意味を直接理解することができる。一方、「無私」「無名」「無学」「無味」などの語では、語基が比喩的に解釈される場合があり、「無私」は「私心がない」、「無学」は「学問・教養がない」といった抽象的な意味を含む。さらに、「無事」「無常」「無難」などの語では、語構成から直訳的な意味だけでなく、語全体として比喩的な意味が形成されており、「無事」は「事故がない」ことから「安全」や「平穏」を、「無常」は「変化すること」から「はかない」という意味へと展開する。そして、「無数」は「数えきれないほど多い」「数限りなく多い」といった意味を示し、ベトナム語と同様に「多い、非常に多い」という特殊な意味があることを確認した。一方で、「無価」は現代日本語では「ただ、無価値」といった意味で解釈されるようになり、「貴重な、良い」という特殊な意味が消失したことが明らかとなった。このことから、現代日本語において「無-」は主に「存在性の否定」として大きく機能しており、その意味機能が「無価」の語義解釈にも影響を与えたと考えられる。さらに、「無-」は生産的な接頭辞として多くの新しい語（「無医村」「無観客試合」「無リスク金利」「無縫まりの窓」など）を形成しており、行為性の否定（「無投票当選」「無洗米」など）や意図性・主觀性（「無人化」「無償化」「無電柱化」など）の表

現といった新たな意味を創出するに至っている。このような意味・機能の変化の考察を通じて、日本語における「無-」が高い語形成能力と意味拡張性を有することが明確となった。

【第4章】では、第2章および第3章の分析結果を踏まえ、日越両言語における「無」ではじまる語の本格的な対照分析を行った。対照の範囲としては、①日越両言語に共通する「無」ではじまる漢語（二字漢語50語、三字漢語10語）、②いずれか一方にのみ存在する語（独自語）、③「無-」と存在の否定を表す固有要素（日本語の「～無し」、ベトナム語の *khōng*）との競合、の3点を設定した。対照の結果、「無-」の意味と機能は、共通の漢語、独自語、そして固有要素との競合という順に、両言語間の共通点が減少し、それに伴い相違点がより明確になることが確認された。具体的に、共通点として、現代日本語とベトナム語における「無-」はいずれも「存在性の否定」を示し、語句において否定的な意味を担っていることが明らかとなった。しかし、日本語の「無-」は、多様な語基と結びつき、新語の創出を可能にする柔軟かつ生産的な接頭辞としても機能している。一方、ベトナム語における *vô*〔無〕は、既存の語に対して強調や評価を付加する形で用いられる傾向が強く、意味の拡張や評価的中立化よりも、マイナスの評価・強調といった限定的な機能にとどまっていることが明確になった。この相違の背景には、日本語の「無-」が「存在性の否定」を示す主要な接頭辞として定着し、「～無し」より簡潔性や含蓄性に優れ、中立的な評価をもつ語彙に多用され、専門用語・術語・名称の形成にも適している点がある。これに対し、ベトナム語の *vô*〔無〕は、否定詞 *khōng*〔空〕（ない）に機能的に圧倒されており、「中立的」ではなく、むしろ「悪い」意味を帯びる用法や、特殊な意味を表現する用法に限定されている。以上の点から、日本語とベトナム語における「無-」の意味・機能の相違は、漢語から両言語に借用された後、それぞれの語彙体系や使用環境の違いにより、異なる発展を遂げたことを示していると結論づけられる。

【第5章】では、漢字文化圏における「無」ではじまる語と接頭辞「無-」が、中国語から日本語・ベトナム語・韓国語にどのように借用・受容・発展したかを考察し、各言語における「無-」の意味と機能的差異を明らかにした。日本語・ベトナム語・韓国語はいずれも、古典中国語から「無」ではじまる語を多数借用し、その語義や「無-」という接頭辞としての意味・機能を間接的に取り入れている。その後、各言語において「無-」が「存在性の否定」を示す用法として用いられ、自国語内部の語形成へと発展していったという共通性が認められる。このように、「無-」という接頭辞は、漢字文化圏においてまず「語形借用 (*Matter-based borrowing*)」として借り入れられ、各言語の内部で「構造借用 (*Pattern-based borrowing*)」として発展してきた。一方、特殊な意味に関しては、「無数」と「無価」という二語の語義を詳細に検討することで、意味の共通点と相違点が明らかになった。「無数」は、日本語・ベトナム語・中国語・韓国語のいずれにおいても「数えきれないほど多い」という本来の意味を保持している一方で、「無価」は再解釈を経て、「ただ」「無料」「無価値」といった新たな意味へと変化していることが確認された。このような変化を通じて、日本語だけでなく中国語や韓国語においても、「無-」は次第に「存在性の否定」を示す機能を強めているのに対し、ベトナム語では *vô*〔無〕が強調や特殊な意味を帯びる形で発達しており、これは漢字文化圏全体においても特別な現象であると結論づけられる。このように、「無-」は各言語の異なる言語体系や使用環境に応じて独自に再解釈・発展を遂げており、その借用過程は単なる語の移入にとどまらず、それぞれの言語体系に新たな意味層を附加する重要なプロセスであることが確認された。

【第6章】では、漢字文化圏を代表する日本語の「無-」と英語の「-less」を対照し、両者が基本的に「存在性の否定」という意味機能を共有しつつ、一部の語では否定の枠を超えて独自の意味を構築し、強調や価値の増幅といった機能を持ち得ることを明らかにした。例えば、「無数 - numberless」や「無価 - priceless」に見られるように、否定接頭辞がスケールのゼロ点を超えて、無限大に向かうような誇張的・強調的な解釈を導くことがある。これは語彙レベルでの語用的な現象と考えられる。ただし、ベトナム語の *vô khói* に顕著に見られる *vô*〔無〕の強調的機能と比べると、英語の「-less」にはそのような用法は明確に認められない。英語においては、「dis-」や「de-」など、他の否定接頭辞が特定の語基と結びつくことで、否定ではなく強調機能を果たす場合があり、これはベトナム語の *vô*〔無〕と共に通する。この対照から、否定接頭辞が特定の語基と結びつくことで、否定を超えて強調的な意味を帯びるプロセスの一端が明らかとなった。このような用法は頻繁ではないが、文法化の過程における意味の漂白 (*Bleaching*)

や機能拡張 (*Functional widening*) と並行して起こる現象である。ベトナム語では、*bát chót* 〈不・突然〉 (=突然に、思いがけなく) や *bát thình linh* 〈不・不意に〉 (=いきなり) にも見られるように、*bát* [不] が語基の意味を強める機能も持っているが、*vô* [無] が「無い」を示すことから反転して「多い」を強調する用法は、きわめて特異である。この強調的用法は、話し言葉としての頻用や語彙的発展の中で、ベトナム語が他の漢字文化圏の言語とは異なるルートを選んできたことを示している。最後に、否定に関する認知言語学および語用論の観点から、「無」は単に「存在性の否定」を表すだけでなく、否定を通じて存在を浮かび上がらせることで、有標性 (*Markedness*) や強調性 (*Hyperbole*) を帶び、「甚だしい」「多い」「良い」といった意味をも持ち得る。このような特殊な意味は漢字文化圏の「無-」や英語の「-less」といった否定接頭辞からなる語に見られるが、「多い」の意味を強調する接頭辞として発展させたのは、ベトナム語の *vô* [無] に特有の現象である。

【第7章】では結論として、研究の成果と意義を総括し、今後の課題について言及した。まず、当初の3つの課題を解決した本論文は、日本語とベトナム語における「無」ではじまる語の意味と機能に焦点を当て、両言語を本格的に比較した先駆的研究である。とりわけ、「無数 - *vô số*」や「無価 - *vô giá*」などの語において見られる、否定の接頭辞「無-」が本来の否定的機能を逸脱し、強調性や価値の肯定といった特殊な意味を帯びる現象を多角的に検証した。それらを通じて、以下の3点を明らかにした：

- I. 「無数」や「無価」など、語基が「数」や「価」といった数量的概念を含む語基において、接頭辞「無-」は単なる否定ではなく、「多い」「貴重な」といったポジティブな意味を派生させる。この点から、「無-」は特定の語基との意味的関係に応じて、語全体として肯定的意味を持ちうると結論づけられる。
- II. 「無数」や「無価」といった語が、一般的な合成性の原理では説明しきれない特殊な意味を帯びるのは、接頭辞「無-」が語基と結合する際に語義が通常の解釈から逸脱し、言語使用の中で生じた比喩（メタファー）を通じて特殊な意味が派生した結果と考えられる。
- III. 日本語などの漢字文化圏では、「無価」が「ただ」「無料」「無価値」として再解釈され、「存在性の否定」が適用されるようになったのに対し、ベトナム語の *vô giá* [無価] は「非常に価値がある」という肯定的意味を保持している。この差異は、「無-」の意味が日・中・韓では合成性の原理により再構築されたことに起因する。

さらに、ベトナム語では、*vô* [無] が「甚だしく～」といった意味を添える機能を持つようになっており、これは、ベトナム語話者の使用習慣の一つとして、「*Cảm thíc Hán Việt* (漢越感覚)」、すなわち一連の語から音韻を基に漢越要素の意味を抽出する感覚 (Phan Ngọc 2000)」に基づく異分析によって生じた現象である。このような使用上の変化は、*vô* [無] が単なる否定を超えて、語の意味構造に新たな機能を加えるという言語的潜在力を示しており、世界の言語に共通する動態の一例として評価できる。本論文は、この現象を通じて、*vô* [無] の意味的・機能的拡張が、言語類型や文化的背景の相違を超えて普遍的に生じうることを論証した。

本論文は、日本語及びベトナム語における「無」ではじまる語に内在する〈否定〉と〈強調〉の二重性を解明するとともに、否定接頭辞が語彙体系に与える影響を理論的かつ実証的に明らかにしたものであり、言語借用・意味変化・語形成に関する研究の深化に大きく寄与するものであると確信する。今後の課題としては、中国語・韓国語を詳しく分析し、より広範な漢字文化圏における「無-」語彙の歴史的変遷や用法の追跡、さらには「不-」「非-」「未-」など他の否定接頭辞との体系的な対照研究が挙げられる。また、言語教育、翻訳、辞書編纂などへの応用的展開も視野に入れ、実践的な貢献の可能性についてもさらなる検討が求められる。

注： [] ベトナム語の漢越語の漢字表記を示す < · > ベトナム語の混種語の表記を示す

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (TRAN QUOC HIEP)		
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	山川 太
	副査 教授	岸田 泰浩
	副査 准教授	PHAN THI MY LOAN
	副査 教授	清水 政明
	副査 教授	今井 忍

論文審査の結果の要旨

審査対象論文は、日本語およびベトナム語における「無」ではじまる語、特に二字漢語に着目し、両言語における語構成要素としての「無-」の意味の相違点と共通点を明らかにすることを目的とする。具体的には、「無-」が示す意味として、「存在性の否定」すなわち「～がない」という解釈が可能な場合と、そうではない場合（合成性の原理にしたがわない場合）に焦点を当て、それらにおける意味の広がりを考察することにより、両言語の語彙における「無-」の機能と意味の多様性を明らかにした。

まず、第1章（序論）では、本論文が着目する日本語およびベトナム語における「無-」の意味特徴（つまり「無数-vô sô〔無數〕：数え切れないほどの多さ、または非常に多いこと。」や「無価-vô giá〔無價〕：値のつけられないほどの高い価値がある、貴重なこと。」のように、日越両語において「存在性の否定」という特徴的な意味が認識されないケース）を明らかにした上で、日越両語における「無-」の意味・機能に関する先行研究を概観し、これまでの研究がどのような視点で「無-」を捉えてきたのかをまとめている。

第2章では、ベトナム語におけるvô〔無〕ではじまる語の意味について詳述されており、ベトナム語に関する各種辞典に収録された語彙やコーパスを元に、現代ベトナム語で実際に使用されている語を抽出、分析し、「無-」がベトナム語においてどのような意味・機能を示すのかが明らかにされた。ベトナム語におけるvô〔無〕ではじまる語の意味は、基本的にvô〔無〕による「～がない」という意味と語基の意味の総和として構成されることが多いものの、一方で、比喩的な解釈が求められる場合もあり、特にvô〔無〕と結びつく語基の意味および当該語全体の語義に基づいて抽象的な意味解釈がなされることも指摘された。さらに、vô〔無〕と語基の総和よりも意味が深く特殊化している語には、量的な「多い」や質的な「良い」といった特殊な意味が表れることがあり、また、vô〔無〕は、これまで認識されていた「存在性の否定」に加え、「行為性の否定」や「価値性の否定」を表すことができることも示された。

第3章では、日本語における「無-」ではじまる語、特に二字漢語を中心に、語の構成要素と語義との繋がりについて考察する。日本語における「無-」は基本的に「存在性の否定」を示し、多くの語においてその意味は「～がない」と言い換えることが可能であるが、「～がない」で直接的に解釈されない語、そして特殊な意味を示す語も存在する。その代表的なものが、ベトナム語とも共通する「無数」の「多い」や「無価」の「良い」といった意味解釈の例である。ここでは、現代日本語においては「無数」が「非常に多い」という従来通り特殊な意味で解釈される一方で、「無価」は本来の意味を失い、「無-」が基本的な「存在性の否定」を表す接頭辞として再解釈された語として位置づけられているという主張がなされた。このような現象は、日本語における「無」ではじまる語が本来の意味を保持しつつも、文脈によって意味の変化を伴い、新たな意味を生み出す可能性を示唆しているとしている。さらに、「無-」が、単なる「存在しない」にとどまらず、「不足している」「十分でない」といった派生的な意味を持ち得ること、そして、「存在性の否定」に加えて、「望ましい状態の欠如」といった否定的かつ評価的な意味も内包することが示され、「無-」の語彙的機能が単なる否定の範囲を超えて、価値判断や状態の程度までも表現可能であることが日本語における「無-」の高い表現力を裏付けていると結論づけた。加えて、特に「無駄」「無茶」「無闇」に見られるように、意図的な強調や、余剰否定かつ過剰否定の表現が「無-」によって導かれる事を示し、結果、これらの語における「無-」の役割は、ベトナム語のvô〔無〕で見られる強調性と類似していることが指摘された。

第4章では、現代日本語の「無-」とベトナム語のvô〔無〕の意味と機能について、対照言語学的視座から検討された。結果、両言語の「無-」の使われ方には多くの共通点が見られる一方で、顕著な相違点も存在することが明らかになった。共通点としては、「存在性の否定」があり、否定的な意味を表現するという特徴を有している。また、両言語において、否定を表す固有表現より、「無-」は否定的な意味を強調する役割を担い、評価や価値の否定を含む場合もある。相違点としては、日本語の「無-」は非常に広範囲にわたる語基と結びつき、具体的か抽象的かを問わず多様な概念を表すために使用され、柔軟性を持った接頭辞として機能することが指摘された。そのため、日本語の「無-」は、新しい語の構成に積極的に関与し、非常に多様な意味を表現するための要素となっている。それに対して、ベトナム語のvô〔無〕は特に新しい語の構成にはあまり関与せず、主に既存の語に特定の意味を加える形で使用されるため、ベトナム語におけるvô〔無〕の使用範囲は日本語の「無-」に比べて狭いとの分析がなされた。

第5章では、特殊な意味を示す代表的な語としての「無数」「無価」に関し、日本語、ベトナム語に限らず、中国語や韓国語における類似した用例を取り上げ、各言語における意味解釈の違いを観察した。

第6章では、英語における否定的接辞「-less」と日本語の「無-」を対照し、両者の意味的機能に関して、以下の点が示された。日本語の「無」および英語の「-less」は、いずれも「存在性の否定」を中心的意味とし、基本的には「存在しない」「欠如している」という意味領域に属する。両者はまた、「少ない」「足りない」といった準否定的意味を表現する点においても共通しているが、その意味変化の方向性には顕著な違いが見られる。すなわち、日本語の「無-」は「存在しない」から「不足」へと意味が緩やかに拡張するのに対し、英語の「-less」は「～が欠ける」から始まり、意味強化を経て最終的に「完全な欠如」へと意味が収束していく。これにより、同じ意味領域に属する否定的接辞でありながらも、その発展の過程は言語ごとに異なる経路をたどっていると主張された。さらに、英語において「-less」を含む派生語の中でも、numberless や priceless のような語では、否定的意味を超えて、量的・価値的な度合いを高度に強調する特殊な意味が生じていることが観察された。これらの語では、否定的接辞が否定意を示すのではなく、「多い」や「良い」といった肯定的な評価の意味を帯びており、「無数」や「無価」といった漢字文化圏における用例に類似していることが確認された。また、英語における他の否定的接辞、特に「dis-」や「de-」に関しても、ベトナム語におけるvô〔無〕と同様、単なる否定の機能にとどまらず、接辞自体が語全体の評価的意味を強調する機能を有しているとの分析が示された。

第7章（終章）では、本論文での考察・分析の結果がまとめられ、「無-」が、日本語の他の否定的接辞、たとえば「不-」「非-」「未-」などとどのように異なるのか、また、本論文での研究成果が言語教育や翻訳論、辞書記述等においてどのように応用可能か、等、今後の課題や展望についても述べられた。

本論文の美点は、第一に、これまで行われてこなかった、日越両語における「無-」の本格的な比較対照研究であるという点であり、非常に挑戦的で、新規性の高い研究であると評価できる。また、直接的な先行研究がないからといって独善的な分析に陥ることなく、それぞれの言語における、関与的な先行研究については丹念にチェックし、両言語における豊富な用例を収集して、考察・分析を行っている点は、議論の手堅さを感じさせるものとなっている。一方で、ベトナム語母語話者としての直観に頼りすぎた記述になってしまっていると感じさせるような箇所もあり、この点が改善されれば、議論の客觀性がより高まったであろうと惜しまれる。このように、いくつかの不備も指摘されるものの、それによって上述のような本論文の有する本質的な価値が損なわれるということはない。

以上から、本論文が博士（日本語・日本文化）を授与するに値する優れた研究であると判断し、審査委員会全員の一一致により合格という結論に至った。